

独立後インドの経済思想(5)：「後期チャクラヴァルティ」の社会認識とインド経済論

ESHO, Hideki / 絵所, 秀紀

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

169

(発行年 / Year)

2001-07-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002764>

独立後インドの経済思想 (5)

——「後期チャクラヴァルティ」の

社会認識とインド経済論

絵 所 秀 紀

1. はじめに

1970年代から80年代にかけてのインドの経済学と経済運営を支えてきた巨人は、スカモイ・チャクラヴァルティ (Sukhamoy Chakravarty) である。あくなき知識欲によって裏付けられた教養と温かい人柄は一チャクラヴァルティに会った人であれば、誰でもが感じとることのできる資質一、いまなお多くのインド人エコノミストの心の中に忘れがたい記憶として生き続けている。彼の著作『開発計画：インドの経験』(Chakravarty 1987a) は独立後インドの経済運営思想と経済パフォーマンスを知る上でも、またインドの開発経験と開発経済学との関係を知る上でも、欠かすことのできない歴史に残る名作である⁽¹⁾。

チャクラヴァルティは1932年7月26日現在バングラデシュのマイメンシン (Mymensingh) に、傑出した知的一家、法律家 (判事) の三男として生を受けた。カルカッタのバリイグンゲ政府学校 (Ballygunge Government School) そしてプレジデンシー・カレッジ (Presidency College) をきわめて優秀な成績で卒業した後、ただちにマハラノビス (P. C. Mahalanobis) が所長であったカルカッタのインド統計研究所 (Indian Statistical Institute) に勤務した。オランダからティンバーゲン (Jan Tinbergen) がカルカッタのインド統計研究所を訪問した際、チャクラヴァ

ルティに強く印象づけられ、ロッテルダムのネザーランド・スクール・オブ・エコノミクス (Netherlands School of Economics) で博士号取得のためのフェローシップを提供した。オランダで博士号を取得したのち、さらに1年間同所で客員研究員を続けた。1959~61年にかけてマサチューセッツ工科大学 (MIT) で助教授となった。この時期にロゼンシュタイン＝ロダン (P. N. Rosenstein-Rodan), サムエルソン (Paul Samuelson), ソロー (Robert Solow) らと知り合った。さらに1963年には客員助教授としてMITで1年間を過ごした。

1957年にラリータ・バードゥリ (Lalita Bhaduri) と結婚した。ラリータも経済学者である。1961年にスカモイとラリータはインドに帰国したが、スカモイはカルカッタ大学の講師職を得ることができなかった。この時ババトシュ・ダッタ (Bhabatosh Datta) がプレジデンシー・カレッジの正教授として、彼を迎え入れた⁽²⁾。1963年からはデリー・スクール・オブ・エコノミクス (Delhi School of Economics: DSE) に移り、1990年8月22日わずか56歳での死に至るまで、DSE教授としての職をまっとうした。この間1965年から71年にかけて計量経済学会 (Council of Econometric Society) メンバーとなり、1969年には同学会のフェローに選ばれた。1974年には、インド計量経済学会から第1回目のマハラノビス金メダル賞が与えられた。

1971年には、わずか37歳で計画委員会 (Planning Commission) のメンバーとなった。現在に至るまで「計画委員会メンバーとして最も若い年齢」(Basu 1991a) である。1977年に至るまで、計画委員会のメンバーとしてインドのために尽力した。また1983年から1990年の死に至るまでは、首相付き経済諮問委員会 (Prime Minister's Economic Advisory Council) の委員長として、インディラ・ガンジー、ラジーブ・ガンジー、V. P. シンと続く3人の首相につかえた⁽³⁾。首相が変わっても、結局チャクラヴァルティに経済諮問委員会の委員長を委嘱したのは、彼の傑出した「知的能力と才能」の賜物であった (Sen 1993)。また1987年から死亡す

るまで、インド社会科学研究審議会 (Indian Council of Social Science Research) の議長を務めた。さらに 1983~85 年にかけては、インド準備銀行によって設立された金融制度委員会委員長を歴任した。『金融制度委員会報告』(Reserve Bank of India 1985) は、財政に従属していた金融政策の自立化を提言した、画期的な報告書である。本委員会は、マネー・サプライの増加目標値を設定すべきであると提言した (Chakravarty 1986a; 絵所 2000a)。

アマルティア・センが伝えているように、チャクラヴァルティは知的な意味できわめて早熟であった⁽⁴⁾。1950 年春、お互いが 16 歳になった時、プレジデンシー・カレッジの学生として、センとチャクラヴァルティは合い知るようになった。その時チャクラヴァルティは「カルカッタの知識人世界の間で、すでに伝説と化していた」。プレジデンシー・カレッジで学士 (1953 年) および修士 (1955 年) を終えたとき、チャクラヴァルティは「まったくの名士一将来を約束された経済学者としてだけでなく、カルカッタ青年の間での思想的指導者」であった (Sen 1993)。

チャクラヴァルティの博士号取得論文『投資計画の論理』は 1959 年に出版された (Chakravarty 1959)。ティンバーゲンが提唱した成長率の「固定目標」枠組みの中で、マハラノビスの 4 セクター成長モデルの動学的一般化をめざしたものである。この著作の中で、チャクラヴァルティは低所得国の「構造的様相」に焦点をあて、それを克服する必要性を強調した。1962 年には、「最適貯蓄」に関する 2 つのペーパーを発表した (Chakravarty 1962a; Chakravarty 1962b)。それぞれ「無限の時間」および「有限の時間」という条件下での最適貯蓄経路に関する理論モデルを構築する試みである。これらの研究は、やがて『資本と開発計画』(Chakravarty 1969) へと発展した。チャクラヴァルティを絶賛するサムエルソンの「まえがき」がついたものである。サムエルソンは次のように書きつけた。すなわち、「チャクラヴァルティ博士はトルストイの二元論に対する興味と同じだけの興味をリニア・プログラミングに対して持つと

いう、ほとんど空集合の珍しい属種である。すなわち、C.P.スノウ (C.P. Snow) の言う二つの文化の論理的な交差である」(Samuelson 1969)。これら一連の仕事によって、開発計画に関する理論家としてのチャクラヴァルティの名声が確立した。

ところが1970年代になると、チャクラヴァルティは純粹経済学者として生きる進路を自ら断った。ティンバーゲンやマハラノビスがそうであったように、「具体的な問題を熟視し」、「社会的に意味のある解決を求め」はじめたのである。「芸術のための芸術はない」と考えるにいたり、「実際の生活状況」へと「わが身をさらす」進路を選択することになった(Chakravarty 1992)。センの表現を使うならば、「形式的モデルの実践的妥当性」に対する信仰が揺らぎはじめたのである。「後期チャクラヴァルティ」の誕生である(Sen 1993)。計画委員会のメンバーになったことが、チャクラヴァルティの学問的関心を大きく変えることになった(Basu 1991a)⁽⁶⁾。

本稿のテーマは、数理経済学者としての「前期チャクラヴァルティ」ではなく、インドの経済運営に深くかかわることになった「後期チャクラヴァルティ」の思考と思想の特徴を描き出すことである。

2. マハラノビス・モデルへの執着

若き日のチャクラヴァルティに決定的な影響を与えたのは、マハラノビスである。チャクラヴァルティの回顧によると、「適切なインドのデータで満たされ得る経済諸関係の、操作可能な意味のあるモデルの重要性」を評価したという点に、「マハラノビスとその他の教師との違い」があった。当時プレジデンシー・カレッジでは、「アングロ・サクソン世界で教えられている経済学とほとんど違いのない経済学」が教えられていた。チャクラヴァルティは、ティンバーゲンと並んでマハラノビスが「人々の生活を良くする」ための「原理としての経済学」に「情熱的なかわり」をもっ

ていた点に、強く惹かれたのである (Chakravarty 1992)。前述した彼の博士論文は、マハラノビスとティンバーゲン両者の影響を色濃く受けたものであったし、その後も生涯にわたってマハラノビスとマハラノビス・モデルについて繰返し言及しつづけた。1988年に行なった、故マハラノビスの95歳の誕生記念式典での講演「マハラノビス—私的賛辞—」(Chakravarty 1988a)は、最も包括的なマハラノビス評伝である⁶⁾。

チャクラヴァルティが初めてマハラノビスに会ったのは、1949年彼がプレジデンシー・カレッジに入ってしばらくたった頃である。チャクラヴァルティの尊敬する先生であったサルカール (S. C. Sarkar) によって紹介された。チャクラヴァルティは、「私の知的形成がまだ固まっていない時に、彼 (マハラノビス) の影響下に置かれたことは大変に幸運であった」と当時を回顧し、「マハラノビスは独立後の少なくとも最初の20年間、インドにおける知的基盤を形成するにあたって卓越した役割を果たした」と述べている。

マハラノビスはケンブリッジ大学で物理学を専攻した学者であったが、イギリスからインドへの帰国の船中で統計学に心惹かれ (絵所 2001a)、帰国後はシール (B. N. Seal) の勧告に従って統計学の研究に打ち込むようになった。チャクラヴァルティによると若き日のマハラノビスの考え方に大きな影響を与えたのは19世紀の物理学者ケルヴィン卿 (Lord Kelvin) であった。ケルヴィン卿は、「質的な推論は貧しい量的な推論以上のものではない」という考えの持ち主であったという。彼の影響の下で、マハラノビスは「計測は科学である」と固く信じていた。その後ネルーと会い知ようになったマハラノビスは、1952年インド科学研究所 (National Institute of Sciences) で行なった講演「国民所得、投資と発展」(Mahalanobis 1952) でハロッド=ドーマー型の成長モデルを明らかにした。チャクラヴァルティは、この講演を評して、「その重要性は報告のオリジナリティにではなく、彼 (マハラノビス) が提示した大胆なヴィジョンにある」とした。そして「経験的に妥当性のある計算」を求めて、理論

的訓練を国民所得、資本ストック等の推計へとつなげた点に、マハラノビスの貢献があったと論じた。

チャクラヴァルティによると、マハラノビスの「操作可能性」への執着に影響を与えたのは、近代物理学の論理に関する書物を著したブリッジマン (P. W. Bridgman) である。そもそも「操作可能性 (operationalism)」という言葉を発明したのは、ブリッジマンであった。彼の考え方は1930年代には物理学の分野以外でも大きな影響を与え、新しく創設された計量経済学会のモットーとも適合的なものであった。「計測は科学だ」というマハラノビスの考え方は、従来のインド経済学と比べると「きわめて斬新なもの」であった。

第2次5ヶ年計画の基礎の一つとなったマハラノビスの4セクター成長モデルについて、チャクラヴァルティは次のようなコメントを付けた⁷⁾。「(消費財)3部門の区分は、通常理解されているように財による区分に基づくものではない。そうではなく、それはインドの社会学的な現実を反映したものである。工場部門での機械による消費財の生産は利潤が重要な目的であるようなゲームのルールに従っており、すべての所得が生産に従事している人々に帰属するような家計企業 (household industry) とはまったく異なっている。私の意見では、これは一つの有効な社会学的な洞察である。インドのデータを見ることによって、彼 (マハラノビス) はこれらの部門を容易に区別することができた」。ところで、マハラノビスの4セクター・モデルに関しては、小宮隆太郎による良く知られた批判がある (Komiya 1959)。小宮が批判したように、マハラノビスの解は最適解ではない。「生産の極大化」という観点だけを重視するならば小宮の批判はもっともであり、マハラノビスの解は「技術的に非効率」であるということになる。しかし、とチャクラヴァルティは続けている。チャクラヴァルティによると、そもそもマハラノビスは「不平等をもたらす生産の極大化ではなく、平等志向的なアプローチを選択」したのであった。マハラノビスは、「部門別の所得分配という観点から」問題を考えたのである。すな

わち「私の考えでは、マハラノビスは（現実との）妥協を図ったのであり、次善の策と呼ばれるものを探したのであった。したがって、それ（マハラノビスのアプローチ）は量的な志向性をもちながら、同時に社会学的な側面に敏感なものとの組み合わせであった」。

マハラノビス・モデルを断固として擁護したものである。しかしチャクラヴァルティはマハラノビスが十分に考慮しなかった点として2点指摘した。第1点目は、土地改革と農業構造に関する論点である。マハラノビスは「農業発展への制度的制約問題」を十分にとらえることがなかったという批判である。この議論はS.R.センが展開した、「バーゲン・セクターとしての農業部門」論と関連している。S.R.センは計画委員会で農業問題のアドバイザーとして活躍した人物である。「バーゲン・セクター」という意味は、「相対的に小さな投資で、また比較的短期間で、必要とされる余剰を（工業部門に）提供できる未開拓の大きな可能性をもった部門」という意味である（Sen 1966, p.3）。この考えはマハラノビスの4セクター・モデルに反映し、その結果マハラノビスは農業部門に対してきわめて低い資本産出高比率を与えた（Chakravarty 1987, p.94, footnote 2）。

第2点目は、「閉鎖経済」の想定に関する論点である。この点に関して、チャクラヴァルティはマハラノビスを擁護した。「第一次産品輸出の伸びは、あの特定の時期における世界経済においては制限されていた」。確かに重工業優先というマハラノビスの考えは、比較優位原則に反するが、「日本経済がきわめて成功裡に機能していた時に、日本でも同じアプローチが採用された」。当時日本は「期待される生産性の向上に基づいて意図的に動学的なアプローチを採用」したのであり、これはマハラノビスが応用しようと思っていたことと「同じアプローチ」である。しかしインドでは日本とは異なって、マハラノビスが意図したようには、彼のアプローチは機能しなかった。何故であろうか。「その解答は、マハラノビスが深く考慮しなかった成長過程における社会学的、歴史的、政治的諸側面の注意深い分析に見出すことができる」と指摘した。最後にチャクラヴァルティ

は、マハラノビスのアプローチは「依然として今日でも基本的な意味で有効である」と筆を置いた。

博識家チャクラヴァルティの面目躍如たるマハラノビス論である。マハラノビスはシールの勧告によって統計学に打ち込むようになったこと、「計測は科学だ」というマハラノビスの考えは物理学者ケルビン卿の影響によってもたらされたこと、また「操作可能性」というマハラノビスの考えは物理学者ブリッジマンの影響を受けたこと等、博識家チャクラヴァルティでなければ指摘することのできない貴重な情報が満載された人物評である。シュンペーターを想起させる筆致である。

1987年に公刊された『開発計画：インドの経験』（Chakravarty 1987a）は、「ネルー＝マハラノビス・アプローチの歴史的意義」という問題に正面から取り組んだ、チャクラヴァルティの代表作である。とくに本書の「インド開発戦略の基礎」と題された第2章は「ネルー＝マハラノビス・アプローチ」を評価したものである。

インドの「構造的後進性」を克服するためには社会主義的な経済政策フレームワーク（プランニング）が必要であるというネルーの考え方は、肯定できるし、納得のいく選択であったというのがチャクラヴァルティの評価である。その上でチャクラヴァルティは、当時「構造的後進性」の背景に横たわる要因として想定されていた点として6点を挙げた（pp. 9-10）。すなわち、

- (1) 発展の基礎的な阻害要因は物的資本の不足である。
- (2) 資本蓄積の速度を制約しているのは貯蓄性向の低さである。
- (3) たとえ国内貯蓄能力が適切な財政金融政策によって向上できたとしても、貯蓄の生産的な投資への転換を阻害する構造的な制約がある。
- (4) 農業は収穫逡減するが、工業では収穫増増がみられ、現行では農業部門で不完全就業状態にある余剰労働力を工業部門ではより生産的に雇用できる。
- (5) 市場メカニズムを一義的なものとするならば、上位所得グループに

よる過度の消費が助長され、同時に経済発展の加速化にとって不可欠の投資が不十分になる。

(6) 不平等な所得分配は「悪い」ものであるが、生産的資産の所有権の急激な変化は生産と貯蓄の極大化にとって有害である。

上記のような想定から明らかなように、「インドの計画立案者たちは、プランニングの問題を基本的には供給サイドから眺めていた」のであり、「国内需要が成長の制約要因になる可能性」は考えられもしなかったと、チャクラヴァルティはコメントしている (p. 11)。

第2に着目されるチャクラヴァルティのコメントは、「50年代中葉のインド開発モデルはルイス・モデルの一変形とみなすことができる」という指摘である (p. 14)。ルイス・モデルとの違いは、(a)マハラノビスによって2部門への分割が導入されたこと、および(b)積極的な役割が国家に割り当てられたことである。ルイス・モデルでは成長の担い手は「近代部門」の資本家であると想定されたが、インドではその役割は開発官僚にも割り当てられた。

第3に注目されるコメントは輸出ペシズムに関するものである。第一次産品に対する需要が非弾力的であると仮定されたとしても、当時のインドには輸出目的のために開発しえたであろう工業製品としての繊維製品があった。チャクラヴァルティによると、繊維産業が軽視された理由は「基本的には政治的なもの」であった (p. 16)。すなわち、(a)繊維輸出を強調することは、他の産業資本家を犠牲にして特定地域の産業化グループを利することになると考えられたこと、および (b)繊維部門は小規模企業に適しているというガンジー主義者の思想的な遺産があったことに求められる。この結果、近代的な繊維産業の速やかな成長の可能性が排除されてしまったと、コメントした。

またチャクラヴァルティは、インド経済開発計画の実施にあたっての限界を2点指摘した。一つは、食糧のような主要消費財のとりあつかいが極めて楽観的であったという点である。先述したように、農業部門を「バー

ゲン・セクター」として捉えたネルー＝マハラノビス・アプローチに対する批判である⁽⁶⁾。もう一つは、プランニング過程の役割が単純化されすぎて考えられたという点である。すなわち、民間部門における所得の増加を奨励しながら、どのようにして公共投資のための資源を得るのかという問題に十分な注意が払われなかった (pp. 17-18)。

さらに、マハラノビスの「学習効果によって資本財生産の費用が逡減する」という想定が実現しなかったこと (p. 17)、輸入代替過程において輸入集約度が過小評価されたこと (p. 18)、そして「その機が熟していたにもかかわらず 1950 年代始めに効果的な土地改革を実施できず、農業転換がほとんど不完全のまま残されたこと」(p. 18) に、ネルー＝マハラノビス・アプローチの弱点を見出した。

3. 開発経済学史への傾倒

チャクラヴァルティが最も得意とし、また好きで好きでたまらなかった分野は広く言えば経済思想史、狭く言えば開発経済学 (あるいは開発思想) の歴史であった。代表作『開発計画：インドの経験』も、様々な経済思想との交錯の中において独立後インドのプランニングの意義を語るという形をとっている点に第 1 の特色がある。とくに脚注で言及されている文献やコメントには出色の面白さがある。また遺作『異議申立経済学者から見た経済学』(Chakravarty 1993) のタイトルからも伺われるように、チャクラヴァルティにはあまり知られていない、あるいは忘れられてしまった文献や研究者にことさら周到な注意を向ける傾向があった。例えば、ヴァン・ヘルデレン (Van Gerderen)、マノイレスコ (Mikail Manoilescu)、マンデルバウム (Kurt Mandelbaum) 等の仕事に対する高い評価である。多くの人がチャクラヴァルティの博識に舌を巻いたのも、うなずける。本節では、チャクラヴァルティによる開発経済学の歴史あるいは開発思想史の特徴を検討する。

チャクラヴァルティの著作の大半は開発経済学に関係したものであるが、ここではとりわけ彼のアプローチの特徴がにじみでた2つの著作、「開発経済学の現状」(Chakravarty 1987a)と「開発経済学の展望」(Chakravarty 1989c)をとりあげたい⁹⁾。

「開発経済学の現状」は、1985年にマンチェスター大学で行なった講義に基づいたものである。それぞれが大きな反響を呼んだ、リトル(Little 1982)、ラル(Lal 1983)、バグワチ(Bhagwati 1984)、セン(Sen 1983)、ルイス(Lewis 1984)、ハーシュマン(Hirschman 1981)の開発経済学の評価を横目に睨みながら行なった開発経済学のサーベイである。残念ながら、センやハーシュマンの展望論文と比較すると、それほど大きな反響を呼ばなかったし引用される回数も多くない。また「開発経済学の展望」は、1989年にケンブリッジ大学で行なわれたマーシャル・レクチャーであるが、未公開である。以下、まとめて紹介する。

チャクラヴァルティは、「開発経済学はどのようにして勃興したか」というテーマの下で、「経済的後進性」問題をめぐって第二次大戦以前に膨大な研究があったことに注意を向けた。彼によると、この問題に貢献したのは「社会人類学者、植民地の行政官、そしてインドのような国におけるナショナリスト経済学者」であった。社会人類学者および植民地行政官は、遅れた諸国(植民地諸国)の人々の「労働および節儉に対する態度」が「進んだ諸国の影響—とりわけ貿易を通じた影響—に継続的に曝されることによって根本的に変わる」ことがないかぎり、経済発展は望めないと考えた。これに対して、インドのナショナリストたちは経済発展のためには外国競争からの「保護」が必要だと訴えた。

「社会人類学者・植民地行政官」の考え方の代表者としてチャクラヴァルティは、わが国でもよく知られているブーケ(Boeke 1953)とマーシャル(Alfred Marshall)の名前を挙げている。ブーケは、「西欧の経済学は東洋の国々には適用できない」とする「オランダ学派」を代表する研究者である。マーシャルも同じような考えをもっていた。のみならずチャク

ラヴァルティは、忘れてならないオランダ学派の研究者としてヴァン・ヘルデレンを高く評価した。ヘルデレンはブーケの主張する「植民地経済における態度と制度の同質性の欠如」を認めながらも、『二重性 (dualism)』という制度的な特性にしかるべき注意を払うならば（西欧諸国と）同じ分析ツールが適用できる」と論じた。この点にチャクラヴァルティは注目した⁽¹⁰⁾。一方、インド・ナショナリストの中でチャクラヴァルティが最も高く評価したのは、ラナデーである (M. G. Ranade)。ラナデーは、リスト (F. List) の影響を大きく受けた保護貿易論を展開した (Ganguli 1977, Ch. 8, をも参照)。

「インド亜大陸が独立した 1940 年代後半」になると「知的展望は変化した」。「後進諸国」の成長の問題は、経済学のツールでとりあつかうことができると思なされるようになった。この点からみて、低開発諸国の発展問題をとりあげた最初の国連報告『低開発諸国における経済発展の諸方策』(United Nations 1951) は「主要な分水嶺」であった、とチャクラヴァルティは評価した⁽¹¹⁾。チャクラヴァルティによると、こうした変化は「適切な価格で常に市場均衡が達成されるとする新古典派経済学の中心的な仮定が放棄」されることによって生じた。ケインズの経済学と戦間期の経験（大恐慌）が、知的展望の変化をもたらす上で大きく影響した。さらにこうした議論は、農村の不完全就業と失業に関する実証研究によって強化された。ジョン・ロビンソン (Robinson 1936)、ルーマニアの経済学者マノイレスコ (Mikail Manoilescu)、ポーランドの経済学者カレツキ (M. Kalecki)、そしてヌルクセ (Nurkse 1953) の諸研究である⁽¹²⁾。これらの研究は、「農村に大量の不完全就業者がいるならば、資本制約は必ずしも発展の足かせにはならない」と主張した。

「農村における大量の不完全就業者」の存在、すなわち「無限に弾力的な労働供給」仮説を最も説得的に展開したのは、アーサー・ルイスである (Lewis 1954)。ルイス・モデルに関して、チャクラヴァルティは興味深いコメントを加えている。1979 年に著した「二重経済再考」(Lewis

1979)で、ルイスは「規模に関する収穫逡増は高賃金部門での労働吸収過程を減速させるであろう」と説明しているが、この説明は「収穫逡増が意味する一側面」でしかないというコメントである。「カルディア的観点」から見るならば、話は違ってくるという指摘である。

ハンガリー出身の経済学者カルディア (Chakravarty 1989b) は⁽¹³⁾、カレツキ (Chakravarty Unpublished) と並んで、チャクラヴァルティが最も心惹かれていた研究者の一人である⁽¹⁴⁾。チャクラヴァルティはカルディアの議論を次のように要約している。

- (1) カルディアは、工業的に遅れた諸国における経済転換の初期段階においては、農業余剰が必要であることを強調した。農業余剰の増加は非農業部門における雇用機会に影響する。その理由は、(a)非農業部門により大きな実質賃金を提供する、(b)工業製品に対してより大きな市場を提供するからである。農業の市販余剰の増加によって提供された工業製品に対する有効需要は、工業部門で収穫逡増が支配的なので、上方に累積的なプロセスをもたらす。つまりカルディアは、工業部門での収穫逡増に戦略的な重要性を与えたのである。
- (2) カルディアは、先進諸国において輸出が成長の推進力になるように、発展の初期段階においては農業余剰が成長の「誘発メカニズム (triggering mechanism)」になると考えた。そして、累積的プロセスが構造転換プロセスになるためには、農業は外部の諸力に対して十分反応しなければならないし、農民は市場志向的な行動をしなければならないと考えた。また、土地改革は農業の革新を促進するので必要であると論じられた。
- (3) カルディアは、スミスとケインズとを組み合わせることによって、経済成長率を決定する需要の役割に注意を向けた。発展途上国にとってケインズのアイデアが生きてくるのは、途上国では実質賃金が工業製品の供給価格を決定するという「固定価格状況 (fixed price situation)」が存在するためである。

チャクラヴァルティは、カルドアのこうしたアイデアは、インドの開発プロセスを分析するにあたっての指針となると考えた。すなわち、「もし農業の成長がより急速であり、かつより高い公共投資率と外部世界の技術変化により敏感であることによって工業部門（とくに機械製造業）における規模の経済が十分に利用されたならば、インドの経済成長率ははるかに高まったであろう」という判断である。

最後にチャクラヴァルティが目を向けたのは、ヴェブレン (T. Veblen) である。開発経済学は、「市場の失敗」パラダイムあるいは単純な「成長の諸段階」という議論にとらわれるだけでは駄目で、もっと「財とサービスの社会的前提条件 (social provisioning of goods and services)」という課題に取り組む必要があり、この点から見てヴェブレンの仕事に注目すべきであると主張した。ヴェブレンは、成長の前提条件として、「非物質的な装備 (immaterial equipment)」あるいは「社会の目にみえない資産 (intangible assets of the community)」を重視した。そして、開発経済学は「脱集計化、制度変化そして社会的革新という諸問題にもっと注意を向けるべきである」と結んだ。

4. インド経済分析の視点—需要面での発展の制約—

1979年、デリーの経済成長研究所から V. K. R. V. ラオの70歳の誕生日を祝った論文集が出版された (Hanumantha Rao & Joshi eds. 1979)。この論文集にはインド内外から錚々たるメンバーが執筆しているが、チャクラヴァルティも「ケインズ、『古典派』、そして発展途上経済」(Chakravarty 1979a) と題するペーパーを寄稿した。

チャクラヴァルティはまずケインズの貢献—方法論面での貢献、実質的な経済分析面での貢献、政策処方箋面での貢献—を的確に要約したのちに、はたしてケインズ体系は途上国経済にどのような「妥当性 (relevance)」をもつのかという問題設定をした。この問題は、かつてラオが「低開発経

済における投資、所得、および乗数」(Rao 1952) 論文で設定した問題と同じである。

チャクラヴァルティは、途上国経済を以下の四条件を満たす経済と定義した。

- (1) 生産と雇用の上限を決定するのは利用可能な労働ではなく、「資本ストック」である。
- (2) 経済は「経常消費」を超える「余剰」を生み出すことができるが、一人当たり生産量は生存維持に必要な消費量を大きく超えることはない。
- (3) 賃金雇用が存在するところでは、いつでも賃金契約は貨幣賃金で行われる。
- (4) 賃金所得からの貯蓄はゼロである。しかしすべての利潤が必ず貯蓄されるということはない。

上記の四条件が途上国にあてはまるとするならば、ケインズ経済学には妥当性がないという結論が得られる。チャクラヴァルティによると、このことは次の四点を意味している。

- (1) 乗数は名目的な大きさ間の関係—すなわち、貨幣所得と貨幣で著された独立支出との間の関係—をあらわすものとして理解されなければならない。
- (2) 短期での実質所得は投資支出の増加に応じて変化しない。
- (3) 消費性向はきわめて高いので生産能力は完全利用される傾向があり、そのため物的資産の投資収益率はきわめて高くなる。
- (4) 貯蓄性向を高める努力をしなければならない。なぜならば、そのことによって速やかに失業者は「利益をもたらす (gainful)」労働に吸収されるからである。

要するに、「ケインズから古典派経済学に舞い戻る」ことが必要だという結論が得られる。これはラオが得た結論とほぼ同じであるが、ついでチャクラヴァルティはルイスの有名な論文「無制限労働供給の下での経済発展」(Lewis 1954) に注目した。

よく知られているように、ルイス・モデルは開発という観点から読みなおされたリカード体系の現代版である。しかしルイス・モデルでは収穫逓減は本質的なものではないとされており、この点でリカード体系とは相違している。またルイス・モデルでは労働供給は外生的なものとされているが、リカード・モデルではそうではない。こうした相違を考えると、ルイスの問題設定は古典派経済学とは明らかに異なったものである。ルイス・モデルでは、資本蓄積が利潤率に与える影響は問題にはならない。ルイス・モデルで最大の関心が払われている変数は、失業者が活動的な労働力に吸収される率であり、この率は資本蓄積率に依存すると考えられている。

ルイス・モデルでは、賃金率が外生的に与えられるならば、資本蓄積率は技術と貯蓄性向によって決定されることになる。どのような賃金率の下でも、もっとも高い利潤をもたらす利潤極大技術がある。すべての資本は完全利用されると仮定されているので、利潤総額が計算できることになる。賃金のすべてが消費され、利潤のすべてが貯蓄されると仮定するならば、貯蓄は自動的に投資され資本ストックの増加となるので、資本ストックの蓄積率が得られることになる。規模に関して収穫一定の生産関数の下では、賃金率が一定である限り、利潤極大技術に対応した資本産出高比率は一定にとどまる。すべての利潤は貯蓄され投資にまわされるので、利潤率は資本ストックの増加率と等しくなる。もし労働力の増加が資本ストックの増加を下回るならば、やがてすべての労働が完全雇用される「転換点」が訪れる。この点から経済は異なったシステムに移行する。

以上がルイス・モデルのエッセンスである。このモデルに対して、チャクラヴァルティは次のようなコメントを加えた。ルイス・モデルは「規範的なものとして」説明されるべきである、あるいは「一定の歴史的に観察された経験を説明する」ものとして理解される必要があるという点である。しかしチャクラヴァルティによると、ルイス・モデルで第一に重要な点は「賃金率が利潤率を決定する」という点である。第二に重要な点はすべての貯蓄が自動的に投資にまわされる、すなわち独立した貯蓄関数がないと

いう点である。すなわちルイス・モデルは供給志向モデルであって、実質生産を決定するにあたってケインズの有効需要原理は妥当性がないことになる。

古典派経済学の諸前提は供給サイドにおけるものである。すなわち、(a)実質賃金率は生存維持水準で一定に維持される、(b)生産物は同質的なものとみなされる、(c)集計的生産関数は規模に関して収穫一定と想定される、である。(b)(c)の仮定を緩め、また実質賃金をリカードが想定したように「穀物」で計測して一定とすると、穀物生産は収穫逓減に従うので、工業部門の生産が規模に関して収穫一定であるとしても、経済制度の行動を決定する重要な要素として工業製品と農産物の相対価格の変化を考慮しなければならないことになる。農産物の相対価格が上昇し、その結果工業部門の実質賃金率が上昇し利潤率は低下する。ここで二つの可能性が生じる。すなわち、(a)貯蓄率(投資率)が低下するかもしれない、(b)投資誘因が減少するかもしれない。しかしその結果生じる経済停滞は古典派的性格のものであって、ケインジアン型の停滞ではない。

以上は、チャクラヴァルティが要約したルイスが展開した議論の要約である。つぎにチャクラヴァルティは需要面に注意を向けた。ルイス・モデル＝古典派モデルでは生産能力が完全利用されると想定されているために、需要面は無視されてきた。しかし経験的にみると、生産能力の完全利用という想定は途上国の場合ですらあてはまらないのではないかと、というのがチャクラヴァルティの問題指摘である。彼は、途上国(インド)工業部門における生産能力の不完全利用の原因は「構造的な性格」であるとして、二つの点を指摘した。すなわち、(a)賃金契約は、途上国においても貨幣タームで行われる、(b)通常工業製品価格は「粘着的(sticky)」であるのに対し、農産物価格は変動しやすい。その結果、農産物価格(とくに食糧価格)が上昇し、貨幣賃金率が一定にとどまるとすると、食糧に費やされる賃金の割合が上昇し、その他の財に費やされる購買力は減少する。その結果工業部門に「過剰設備」が生み出されることになる。一方貨幣賃金率が上昇

するならば、一般物価水準が上昇して、「相対的に固定的な所得を受け取る人々」の購買力が低下することになる。最後に、実質的に政府支出を維持しようとする、多くの場合政府は中央銀行からの借り入れに依存することによって購買力を創出しようとする。そうなると貨幣が増発され、その結果生み出される「賃金—物価スパイラル」によって在庫投資の収益率が上昇し、さらなる生産能力の不完全利用がもたらされることになる。こうした問題は「ケインジアン的な性格」のものである。さらにケインズが指摘したように、現代の経済では貯蓄主体と投資主体とが異なるという点を考慮するならば、経済発展のために貯蓄率を引き上げることが必要だと言うだけでは十分ではない。投資環境が改善されなければならないし、金融仲介も重要な論点となる。つまり企業の規模が小さくまた家族所有による企業を想定して成り立っている古典派経済学の資本蓄積論は、現在の途上国経済に対するモデルとしてはもはや妥当性がない、と論じた。

みられるようにチャクラヴァルティ論文は、ラオ＝ルイスによる古典派のアプローチに対する批判を目指したものであった。さらに彼はこう続けている。すなわち、たとえ潜在的な供給増加がもたらされたとしても、相対的な需要不足によって潜在的な供給増加が実現することなく所得分配の歪みもたらされる。したがって経済発展にとって賃金財部門における一人当たり経済余剰の増加は決定的に重要であるけれども、その余剰が不必要な消費や社会的に望ましくない資産追加に浪費されないような工夫がなければならない。「不確実な状況下での分権的な基礎に基づいて数多くの投資決定が行われる途上国における経済機構の機能」を理解するためには、ケインズ経済学は多くの妥当性をもっている、というのがチャクラヴァルティの結論である。チャクラヴァルティが同時期に発表した現代インド経済論の古典と呼ぶことのできる論文「国内市場の問題とインド経済成長の展望」(Chakravarty 1979b)では、「需要不足」すなわち「狭隘な市場」という観点からインド経済の分析が行われている。また開発経済学者としてのカレツキの意義を論じた論文では、「食糧価格高騰の利益が豊か

な農民だけに帰属し、独占度が増加する」ような発展途上国では、「需要不足」と「インフレーション」が同時発生する可能性がある」と論じた(Chakravarty Unpublished; Chakravarty 1974をも参照)。いずれも「賃金財の制約」によって「所得分配の歪み」が生じる点に着目した議論である。

ラオ論文と比べると、チャクラヴァルティ論文の水準が格段とあがっていることがわかる。その理由の一つは、いうまでもなく独立後インド工業化の経験である。ラオ論文が書かれた時には、チャクラヴァルティが指摘したような「生産能力の不完全利用」あるいは「過剰設備」の問題は浮上していなかった。またラオの時代に広く流通していた開発経済学では、古典派的な供給制約モデルが支配的であった。貧しい諸国では、貧しいが故に需要は無限にあると想定されていたのである。ところが実際に第二次大戦後の途上国が直面した状態は、かつての古典派経済学が直面した先進工業諸国の初期工業化段階の状況とは大きく異なっていた。古典派経済学が想定したセイの法則は、ケインズ以降の先進工業諸国にあてはまらないだけでなく、途上国経済にもあてはまらない。途上国経済でも機械設備(固定資本)は巨大になり、貯蓄主体と投資主体は別個の経済主体である。つまりケインズが想定したような経済機構は途上国にもみられる。途上国だからといって、小規模な家族経営を想定した完全競争型の経済機構を想定することは誤りであるというのが、現実感覚に溢れたチャクラヴァルティの指摘である。

5. 南アジアと東アジア

1980年代後半になると、チャクラヴァルティは東アジア新興工業諸国(韓国, 台湾, 香港, シンガポール)の目覚しい経済成長の経験に着目するようになり、東アジア経済との対比において南アジア経済を論じるようになった(Chakravarty 1987c; Chakravarty 1987d; Chakravarty

1988d; Chakravarty 1990)。

「マルクス経済学と今日の発展途上国」(Chakravarty 1987c)は、チャクラヴァルティが初めて触れた東アジア経済論である。まず彼は、新古典派経済学的な解釈による東アジア諸国の高度成長論は、次の3つの要素を含んでいると指摘した⁽¹⁵⁾。すなわち、(a)高度成長期における外向的戦略の維持、(b)外国民間資本に対する開放的環境の維持、(c)「正しい価格の維持」、すなわち相対的に低い労賃、相対的に高い金利、そして「現実的な」為替レートの維持、の3点である。その上で、東アジア諸国の高度成長は本当にこれらの3つの要素によって説明できるのであろうかと問いかけ、とりわけ韓国の経験に注意を向けた。チャクラヴァルティが最初に強調した点は、韓国の工業化に果たした「経済ナショナリズム」の役割である。ついで強調した点は、「労働時間の長さ」である。韓国の輸出志向政策を理解するためには、「労働使用の高度な集約性と工業化プロセスにおける機械化の進展を含むきわめて長い週労働時間」がキーとなるという解釈である。そして、韓国の経験は「低い個人貯蓄、高く持続的な資本流入、決然たる貿易志向性、きわめて高い労働使用」によって特徴づけられると論じた。「労働組合に対する大きな制限は(韓国工業製品の)輸出競争力維持に役でただけでなく、国内市場を拡大させながら、実質賃金の堅実で顕著な増加を可能にした」。そして、「格差的かつ全般的に低い金利政策の採用、とりわけ優遇された工業グループに対するマイナス金利での貸付と過剰なまでの減税によるインセンティブこそ、韓国国内での投資需要を刺激する力強い道具であった」。すなわち、新古典派経済学者が主張するような「価格を正しく維持する」という政策とは、およそ程遠いものであったという解釈である。「首尾一貫した政策を形成するにあたって、戦略的な観点から政府の介入が必要とされたに違いない」と論じた。アムステン(Amsden 1989)やウエイド(Wade 1990)とほとんど同じ解釈である⁽¹⁶⁾。もう一点チャクラヴァルティが強調したのは、「東アジア諸国における農業生産の拡張は、大規模な農村失業を生み出す諸条件を創り出すことなく、

土地節約を目的とするルート」によって達成されたという点である。そこで生じた機械化は「労働節約型 (labour-esque)」というよりは「土地節約型 (land-esque)」であった。「労働節約型 (labour-esque)」および「土地節約型 (land-esque)」という言葉は、周知のようにアマルティア・センによる造語である (Sen 1960, pp.91-97; 絵所 2000b)。センと同様にチャクラヴァルティも、農村に大量の失業者がいるようなインドや東アジアのような低開発経済 (すなわちルイス・モデルが想定しているような経済) においては、土地節約的な資本と技術への投資が必要であると考えていた。

「南アジアにおける開発の経験」と題するペーパー (Chakravarty [1988d]) では、東アジア新興工業国の経験は「国家介入が果たした大きな役割と特殊な初期条件の果たした役割」のために一般化できないとした上で、南アジア諸国でも開発プロセスにおいて国家のイニシアチブが決定的な役割を果たした点に注意を向けた。構造的・初期条件的・社会経済的な視点から見ると、市場メカニズムは南アジア諸国では十分に機能せず、したがって無節操な経済自由化は所得と富の偏在を強化するだけで、成長の成果は貧困層にまで浸透しないと論じたペーパーである。次のような議論を展開した。

- (1) 南アジア経済に非効率が存在することは疑う余地はないが、非効率な資源利用が緩慢な工業化の唯一の原因ではない。とくにインドにおける問題は、資源ベースを拡大しようとする努力と資源利用の効率を確保する必要性との間の緊張から生じている。例えば 70 年代後半までにインドの国内貯蓄率はかなりの水準にまで達したが、それに見合うだけの成長の加速は見られなかった。効率と成長は必ずしも歩調を共にするわけではない。適切な制度的な推進力と変化が必要であり、開発戦略の一部に組み込まなければならない。翻ってこれは特定の国の社会的反応に依存している。
- (2) したがって開発プロセスは単に「市場の失敗」パラダイムあるいは

「成長段階」アプローチ、あるいはまた「外向的—内向的」工業化戦略という観点だけからでは評価することはできないし、概念化することすらできない。様々な国で作用している構造的、文化的、社会政治的な制約要因を考慮に入れた開発経験の総体を見なければならない。

- (3) 南アジア諸国における主要問題の一つは貧困の継続である。初期の開発政策においては貧困の撲滅は経済成長（物的資本形成）に依存していると論じられ、また成長の利益はやがて貧しい者を含む社会全体に「トリックル・ダウン」すると信じられていた。この考えに対して、彼は次のようなコメントを加えた。(a)「トリックル・ダウン」効果が社会の全ての層に及ぶであろうとする仮定は空間的にも社会的にも人々の間に相当程度と同質性と移動性があるということを意味している。しかしこの仮定は南アジア諸国では明らかに妥当しない。(b)人的資本形成によって補完されないならば、物的資本形成の増加だけでは急速な経済成長をもたらすことはできない。人的資本形成は急速な人口増加を経験している南アジア諸国ではますます重要である。(c)貧困層の消費を増加させるような公共政策は平等と成長の双方を同時に促進する。基礎教育、技能伝達、栄養、健康と医療設備への公共支出は貧困層に対して直接的な消費利益を提供するものであるが、さらに重要なことは彼らの生産能力を高め、そのことによって成長への貢献を高める人的資本への投資である。(d)少なくとも南アジア諸国では、貧困と人口増加とは密接に関連している。健康と医療設備の拡張、識字率と教育水準の改善といった人的資本を構成する諸要素の発展は貧困を低下させるだけでなく、長期的には出生率を引き下げることによって人口増加率を低下させることができる。
- (4) 南アジア諸国はほとんど同時に3つの決定的に重要な転換に着手しなければならない。すなわち人口転換、農業転換、そして工業社会に向かった転換である。南アジア諸国間における初期条件の違いは、こうした諸転換と経済成長のパターンに影響を与えようである。

- (5) 南アジア諸国は自国の資源賦存に見合った工業化戦略を發展させなければならない。食品、繊維、皮革製品、およびその他の農業基盤工業といった基礎消費財工業の急速な發展をもっと強調すべきである。他方、耐久消費財の發展に基礎を置く工業化は現存の所得分配を悪化させるだけである。
- (6) 南アジア諸国には農村に居を構え、おもに農業に依存している多くの労働力が存在する。たとえ労働集約的な工業化が遂行されたとしても、農業部門の余剰労働力が農業以外の職につけるスピードには限界があるので、南アジア諸国は少なくともあと数十年間は余剰農業労働の重荷を背負わなければならないことは明らかである。すでに厳しい土地制約が働いていることを考えると、土地集約的かつ労働集約的な農業戦略を立案することがますます重要である。
- (7) 様々な理由によって、南アジア諸国の開発プロセスにおいて公共部門は重要な役割を果たし続けるであろう。その理由というのは、(a)南アジア諸国は依然として電力、運輸、通信といったインフラ設備が不十分であるというハンディキャップを負っている。こうした分野に民間部門は参入したからない。(b)これらの諸国は近年経済政策の自由化を進めている。こうした政策の採用にあたって、市場諸力の自由な運動が効率的な資源配分をもたらすであろうと前提されている。しかし信用、労働、技術の不完全な市場を所与とすると、これらの諸国の市場が正しい価格シグナルを提供するとは考えられない。市場の不完全性によって引き起こされた歪みを克服するためだけでも、国家の介入は必要である。
- (8) 資源の制約と高い人口圧力のある南アジア諸国では、エネルギー、鉱産物、森林、およびその他自然資源の集約的利用を巻き込んだ先進諸国の工業化と都市化—これは過剰消費社会の必要を満足させるものであり、また様々な生態的な問題を創り出した—を模倣すべきではない。南アジア諸国は持続可能な成長を許容するような生態的な balan

スのとれた、自国の資源賦存に見合った工業化を推進すべきである。
先進工業国ですら規制の解かれた市場メカニズムでは持続可能な成長は不可能である。

「公平を伴う成長のための開発戦略：南アジアの経験」(Chakravarty 1990)は、「雇用機会の創出と貧困の撲滅」というテーマに焦点をあてたペーパーである。インドの計画立案者たちは当初から「公平と再分配」という論点を重要視してきたが、彼らはいくつかの制約条件の中でこの問題を考えざるをえなかった。チャクラヴァルティによると、「いくつかの制約条件」とは、(a)政治的民主主義という枠内で農業社会の構造転換の方途が探られたこと、(b)高度に不平等な資産(とりわけ土地)の変更を選択する余地が大きくなかったことである。その結果、計画立案者たちは土地生産性の改善を目指して、農業における資本形成問題により集中するようになった。灌漑や調査研究への公共投資と価格支持、穀物買い上げ、および投入財への補助金によって農業を発展させようとした。一方、工業開発の分野では、基礎資本財産業および電力・運輸といったインフラ・サービス部門に対する公共投資の役割を重視した。こうした開発戦略に対して、チャクラヴァルティは次のような評価を下した。(a)農業部門での大規模な公共投資は高収量品種の採用とあいまって、人口成長率よりも高い食糧穀物生産の成長率を維持することに成功した。(b)また価格支持、買い上げ、投入財補助金といった公共政策は、外貨準備の節約に役だっただけでなく、食糧の安全保障と不順な天候に対する回復力を強化した。飢饉のおそれが過去のものとなったことは特筆に値する。(c)しかし同じ戦略は、農産物(とくに食糧穀物)の生産に関して地域間の格差を生み出した。(d)また同一地域内でも社会階層間(地主、小作、土地無し農業労働者の間、また大規模・中規模農家と小規模・限界農家との間)の格差を生み出した。(e)一方、工業開発戦略は民間・公共両部門での非効率性と高コストの生産をもたらした。(f)また高度に入り組んだ規制体系は資本産出高比率を上昇させる一つの要因となった。しかし国家の役割を縮小し、対外的な機会をもっと利用

したならばインドの成長実績は改善したであろうと論じることすなわち新古典派的アプローチは間違いである、とチャクラヴァルティは論じた。そして彼は韓国の経験に目を向け、そこでは土地改革と並んで「いくつかの戦略的な点に対する国家の介入」があった点を強調した。では何故インドを始めとする南アジア諸国では、貧困はなくならないのであろうか。チャクラヴァルティの解答は次のようなものである。(a)プランニングの初期の段階では、農業構造と工業化を加速するための土地改革の潜在的な意義が、計画立案者たちによって十分に把握されていなかった。(b)物的な要素賦存、耕作技術に対する知識、および所有権の間の相互作用という観点から、農業構造が十分に理解されていなかった⁽¹⁷⁾。チャクラヴァルティが得た結論は、「経済成長の加速は、それ自身では貧困撲滅にとっては十分ではない」というものである。

以上の議論からも伺われるように、チャクラヴァルティはインドの経済発展における輸出が果たし得る役割にやや悲観的な考えをもっていた。「インド開発戦略の諸側面」(Chakravarty 1984a)で、彼は次のような議論を展開した。すなわち、「私は輸出パフォーマンスを引き上げる必要性を過小評価しているわけでもないし、またいくつかの部門において輸入代替が過度に高価であることを否定しているわけでもない。しかしこの段階で、インドが輸出の前線で主導的な国の一つになるとは思われない」。その理由として彼は、(1)インドでは非貿易部門の相対的規模があまりにも大きくて、国内需要を満たすことすら困難な状態にある。(2)十分な輸出競争力を創出するにいたるほどの実質賃金の引下げは不可能である。(3)現在、世界経済で生じている技術変化は新たに生まれつつある国際分業に大きな不確実性をもたらしている、の3点をあげた。このペーパーに対してバグワチ＝スリニヴァサンが批判を寄せた(Bhagwati & Srinivasan 1984)。彼らは次のように論じた。すなわち、東アジア新興工業国に見られたような「輸出促進戦略によって生み出された卓越したマイクロ政策のインセンティブは、健全なマクロ政策の基礎の上に築きあげられたものである」。また

「インドの悲劇は、保守的ではあるが穏当なマクロ政策をもちながら、(貿易政策を含めた)ミクロ政策がこの事実を利用できなかった」ためであり、その責を負うものは「不当な輸出ペシズム」である。要するに満足のいかないインドの輸出パフォーマンスの原因は、「インド経済政策の誤った前提」にあると結論した⁽¹⁸⁾。

6. おわりに—「後期ヒックス」への思い—

遺作『異議申立経済学者から見た経済学』(Chakravarty 1992)の中で、チャクラヴァルティは「ディシプリンとしての経済学」は「歴史と理論の狭間」に位置していると書き残した。この表現は後期ヒックスが繰返し述べていた言葉を、そのままもってきたものである。晩年のチャクラヴァルティは、ヒックスの辿った道に最も心を惹かれ、自らの生涯をヒックスのそれに重ね合わせていたふしがある。1989年5月に死去したヒックスに対するチャクラヴァルティの短い弔辞を読むと、チャクラヴァルティは自らのことを語っているのではないかという錯覚にとらわれる。1950年代からヒックスはウルストラ・ヒックス夫人を伴って何度もインドを訪問し、インド人エコノミストから多大な尊敬の念をもって受け入れられてきた。チャクラヴァルティのヒックス論をみておこう(Chakravarty 1989a)。

「経済理論家としてのヒックスは『価値と資本 (*Value and Capital*)』の著者としてのジョン・R・ヒックス (John R. Hicks) の直系の子孫ではなかった。冗談半分にヒックス自身がよく言っていたように、ジョン・Rはジョン・Hの一種の『私生児』であった。しかし冗談は真実を言い当てていた。ジョン・Rは、『価値と資本』—その重要性は久しく持続した—によって、傑出した経済学者としての賞賛を博した。しかしジョン・ヒックスはこの書物から距離を取った。というのも、経済理論にかかわる基本問題を熟考しつつけるにつれ、彼の知覚は広がったためである。とりわけ最も生産的であった後半の20年間はそうであった。1970年代に著した2

つの書物、すなわち『資本と時間 (*Capital and Time*)』と『経済学における因果関係 (*Causality in Economics*)』は、彼が戦前に著した『価値と資本』で採用した観点からの変更を反映している⁽¹⁹⁾。

若き日のヒックスはワルラスによって大きく影響されたが、晩年になるにつれアローやデブルーたちによって展開されたワルラス経済学の「秘教的な拡張」に疑問を感じるようになった。晩年のヒックスは「時間の非可逆的性格」を明確に自覚するようになった。すなわち、「時間が単純なパラメーターとしてあらわれる数学的人口産物ではなく、一方向的な時間の中で機能する経済制度の理論」を構築しようとした⁽²⁰⁾。

「ヒックスは、経済学は理論と歴史の狭間に位置する主題であると感じていた。それ故、しばしば純粹理論の高僧と見なされてきたヒックスが『経済史の理論 (*A Theory of Economic History*)』と呼ばれるきわめて魅力的な書物を著したとしても、驚く必要はない。この小さな書物は、ちょうどカール・マルクスが生産と生産諸力の発展という観点から歴史を見たように、交換の発展という観点から歴史的なプロセスを分析したものである」。

「『経済学における因果関係』—ある人によって素人的な書物と評された—に見出される後期ヒックスの哲学的興味は、基本的には経済学がそれ自身の問題領域にふさわしい適切な方法を見出したかどうかという点に関する不安の感覚によって導かれたものである」。

「純粹経済学者」から「人々の生活を良くするための原理としての経済学者」を目指して転身したチャクラヴァルティにして、言い得たヒックス評価である。晩年のチャクラヴァルティは、「経済の理論化にあたっての歴史の中心性」あるいは「どのようにして経済学に歴史が入りこむのか」という問題に心を砕いていた。新古典派経済学が前提している方法論的個人主義は、経済現象を理解するためには「不十分であり間違いをもたらすもの」であると確信していた。「経済行動は社会行動の一側面」であり、「経済はいつでも『社会』の中に埋めこまれてきた」ことを強調していた。

後期ヒックスに強い共感を寄せた理由である。同様の理由で、チャクラヴァルティはマルクス、シュンペーター、ヴェブレン⁽²¹⁾に共感を抱いていた(Chakravarty 1982; Chakravarty 1987b)。歴史的長期動学アプローチこそ開発経済学の課題としてふさわしいと考えていた。

「経済学のような主題にとって、単純に〔分析の〕単位を『個人』のレベルにまで還元してしまう立場は大きな過ちをもたらさう。経済行動の重要なパターンは、諸制度を通じて連関している組織というより高いレベルで生じる。新古典派経済学の分析は、せいぜいきわめてアドホックにしか制度をとりあげることができない。歴史は経済学者にとって不可欠である。歴史は、時間をまたがる制度の発生に関して、重要な洞察をもたらすことができるからである」(Chakravarty 1992)。しかしチャクラヴァルティは、ついに自らの「経済史の理論」を完成することなく、「経済の理論化にあたっての歴史の中心性」というアイデアを具体化することはできなかった⁽²²⁾。

チャクラヴァルティの先輩にあたるアショク・ミトラの弔辞は、もっとも強烈なチャクラヴァルティ批判である(Mitra 1993)⁽²³⁾。チャクラヴァルティは「経済理論に対しても経済分析の道具に対しても貢献しなかった」し、結局は「学問的なアブ(academic gadfly)」にすぎなかったという評価である。その上で、チャクラヴァルティは「カルカッタ病の犠牲者」(必要性がないにもかかわらず、ともかくも様々な名前を増殖させる一すなわち教養をひけらかす一病)であったこと、また彼には学術趣味があったことが指摘されている。酷評の類であるが、読者の誤解をまねかないように付け加えておかなければ、ミトラの批評はチャクラヴァルティに対する近しい者からのそれであって、憎しみの感情によって書かれたものではない。まったく逆である。おそらくミトラはこの弔辞を書きながら、涙がとまらなかったものと推測される。

1990年8月22日のチャクラヴァルティの死によって、ネルー時代から生き続けてきたインド経済思想は終わりを告げた。「構造主義的開発計画」

の意義を説得的に展開できるエコノミストは、チャクラヴァルティを最後の砦として、インド国内にもはや見出すことはできなかった。時代は、急激に大きく変わりつつあった。中国を含む東アジア諸国の経済が「奇跡的な」高度成長を遂げる一方で、ソ連・東欧社会主義システムはあえなく崩壊した。こうした国際経済環境の激変の中で、1991年にインドはかつてない対外債務危機と政治経済危機に襲われた。

政治経済危機の真っ只中で政権の座についたナラシマ・ラオ首相は、マンモハン・シンを蔵相として起用した。シン蔵相は、インド経済が生き延びる道として市場自由化を求める経済改革の遂行に活路を見出そうとした。

シン蔵相は若き日からの畏友バグワチとスリニヴァサンに経済改革の道筋を示すポリシー・ペーパーの策定を依頼し (Bhagwati & Srinivasan 1993; 絵所 2001b)、彼の手になる経済改革はすばらしい成果をもたらした。しかし、もしこの時チャクラヴァルティが生きていたならば、インド経済改革の道筋は大きく変わっていたであろう。チャクラヴァルティに対する人々の強い尊敬の念が、おそらくインドの経済改革を押しとどめる要因として働いたに違いない⁽²⁴⁾。インド国内のネルー主義者、構造主義経済学者、左翼エコノミストは、寄るべき大木を失い、経済自由化に反対する声を失った⁽²⁵⁾。チャクラヴァルティの影響を大きく受けたバードゥリ、ハヌマンタ・ラオ、ラガヴァンは、「1990年のチャクラヴァルティの死は、インドの経済思想と政策策定に一つの知的な空白をもたらした」 (Bhaduri, Hanumantha Rao & Raghavan 1993) と書きつけた。実感であろう。チャクラヴァルティは根っからの学者にして、知的巨人であっただけではない。虚弱体質であったにもかかわらず、私心なくインド国民経済の運営に惜しげも無くわが身を投げ打ち、一生を捧げた、清廉潔白な紳士であった。誰からも尊敬され、敬愛された。「巨星墜つ」ことによって、インドはようやく本格的な経済自由化への道を踏み出すことができたのである。

《注》

- (1) 本書は、1985年にオックスフォード大学のラダクリシュナン記念講演に基づいたものである。独立後インド経済について勉強したいという学生に対して、一冊しか文献を紹介できないとするならば、私は躊躇無く本書を薦める。石川滋による書評がある(石川1990, 第7章補論)。石川は、チャクラヴァルティの「計画経済化に対する並々ならぬ愛着と経済自由化に対する留保つきの受け入れ姿勢が反映した」書物であると評している(p.277)。
- (2) ババトシュ・ダッタはすぐれた経済学者にして経済思想史家であるが、それにも増して「偉大な教師」であった(Bagchi 1988; Banerjee 1991)。1950年10月から1962年までプレジデンシー・カレッジの教壇に立った。ただし1953年12月～1956年11月にかけては、IMFの南アジア局長として勤務した。チャクラヴァルティ、アマルティア・セン、アミヤ・バグチ(Amiya Kumar Bagchi)を始め、「二世代にわたって」多くのきわめてすぐれた学生を育てた。アマルティア・センは、「ババトシュ先生の講義の息をのむような明快さ」は、講義の「モデル」であったと述べている(Sen 1997)。また彼は多くの政府委員会の委員を歴任しただけでなく、インドの経済政策・経済運営に関する実に数多くの批判的時論をあらわした(Datta 1992は、最新の時論集である)。1961年にババトシュ・ダッタが行った「インドにおける経済思想の進化」と題するバナジー記念講演の最終章では、「若きエコノミスト」たちの仕事が紹介されている。その中で彼は、「バグワチ、セン、チャクラヴァルティが行ったタイプの研究は、本当にエコノミストとして期待されるタイプの研究である」と強調した(Datta 1962)。慧眼の持ち主である。
- (3) 経済諮問委員会の1989年の報告「現在の経済情勢に関する報告」—チャクラヴァルティが委員長時代の最後の報告—が、インドの代表的経済新聞『フィナンシャル・エクスプレス紙』に掲載されている(Economic Advisory Council 1989)。「成長の型、財政制度、および国際収支が関連したセットとしての構造的不均衡」という観点が強調されている。
- (4) サムエルソンも同様の観察をしている。「カルカッタおよびロッテルダムからマサチューセッツ工科大学(MIT)に来る前に、すでに彼(スカモイ・チャクラヴァルティ)はすべてのことを知っていた。少なくとも私が知りたかったことすべてを知っていた」。サムエルソンは、「博識家にして賢人」とチャクラヴァルティを評している(Samuelson 1993)。

またDSEでチャクラヴァルティの年少の同僚であったカウシク・バサーは、チャクラヴァルティの「経済学と経済思想史」に関する知識は「シュン

ペーター的広がり」をもっていたと評し、また「経済学以外の文献も貪欲に読み、読んだものはすべて記憶していた」と述べている (Basu 1991a)。チャクラヴァルティの教え子であったムンドレの回想も参照されたい (Mundle 1990)。

- (5) 簡潔なチャクラヴァルティ論として、Byres 1998a を参照。他に、Brahmananda 1990; Mundle 1990; Agarwal 1991; Harcourt & Singh 1991; Bhaduri, Hanumantha Rao & Raghavan 1993; Mitra 1993; Basu 1994a; Rakshit 1997.
- (6) 他に、Chakravarty 1975; Chakravarty 1980; Chakravarty 1985; Chakravarty 1987a, Chs. 2-3; Chakravarty 1987b; Chakravarty 1988b. Chakravarty 1992.
- (7) 4セクター・モデルは、有名な2セクター・モデル (Mahalanobis 1953) に引き続いて、第2次5ヶ年計画策定のベースとなるべくマハラノビスが作成したものである (Mahalanobis 1955)。2セクター・モデルで想定されていた投資財生産部門と消費財生産部門のうち、消費財生産部門をさらに3部門に分割したものである。すなわち、工場部門での消費財生産、小規模・家内工業部門での消費財生産、そして健康・教育のようなサービス部門の3部門である (絵所 2001a)。また2セクター・モデルの特徴について、バグワチ=チャクラヴァルティは、「貯蓄率上昇の必要性を強調するケインジアン的な『フロー』分析から、増大する投資維持のために転換制約と資本財供給の必要性を強調する『構造主義的』見解へのシフト」、および「閉鎖経済と消費財から資本財への資本ストックの完全非転換性」を想定していた点に求めている (Bhagwati & Chakravarty 1969)。
- (8) 賃金財の制約によって経済発展が頓挫するという考えは、マハラノビスに對抗した開発戦略を提唱したヴァキル=ブラマナンダにまで遡ることができる (Vakil & Brahmananda 1956; 絵所 1999)。若き日のチャクラヴァルティも、「その限界にもかかわらず、農業部門における偽装失業によって引き起こされた問題を分析する枠組みを組み立てようとした、ヴァキルとブラマナンダの試みは注目するに値する」と高く評価している (Bhagwati & Chakravarty 1969)。
- (9) もう一つの着目されるペーパー「経済成長への代替的アプローチ」 (Chakravarty 1982) は、新古典派成長理論として拡張された「ミル=マーシャル・アプローチ」とジョン・ロビンソンやニコラス・カルドアによって継承された「マルクス=シュンペーター・アプローチ」を大胆に対比させた成長論学説史の展望論文である。サムエルソンによる批判がある

(Samuelson 1993)。サムエルソンは、「主流派成長理論」と「マルクス＝新ケインジアン＝スラッファ経済学」の対立として捉えるべきであると主張した。また主流派成長理論は、チャクラヴァルティの主張するように「ミル＝マーシャル」として把握されるべきでなく、むしろ「ヴィクセル＝シュンペーター」あるいは「クズネツツ＝ソロウ」として把握されるべきであると主張した。

- (10) 開発経済学の歴史に関する書物において (Arndt 1987), アーントはインドネシア研究者であるにもかかわらず、ヘルデレンの仕事をまったく無視していることは「残念であり」かつ「驚くばかり」である、とチャクラヴァルティはコメントを加えている。
- (11) この報告書は「少なくとも 25 年間にわたる開発のコンセンサス」となった、とチャクラヴァルティは評価した。この委員会には、カリブ海からアーサー・ルイス、インドからガドギル、アメリカのシカゴ大学からセオドア・シュルツが参加していた。
- (12) この他にも、ロゼンシュタイン＝ロダン、ミュルダール、シトフスキー、リチャード・カーンの研究にも大きな興味をいだいていた。一言で言えば、いわゆる「構造主義」開発経済学に対して大きな共感を抱いていたのである。ロビンソン、ロゼンシュタイン＝ロダン、ミュルダール、カルドアに対するチャクラヴァルティの評価を参照されたい (Chakravarty 1983a; Chakravarty 1983b; Chakravarty 1987f; Chakravarty 1989b)。
- (13) ニコラス・スターンも、「経済成長過程における所得分配の役割」の分析および「静学のおよび動学的な収獲増」分析という観点から、新しい成長理論にとってカルドアの仕事がもっと評価されてしかるべきであると論じている (Stern 1991)。
- (14) より一般的に言えば、「ポスト・ケインジアン」の仕事に惹かれていた (Chakravarty 1988e; Chakravarty 1983b)。
- (15) 新古典派的解釈の代表者としてチャクラヴァルティが挙げたのは、J. バグワチ、A. クルーガー、T.N. スリニヴァサン、B. バラッサである。
- (16) 韓国の経済成長の経験をめぐる議論については、絵所 1991, 第 1 章, 第 3 章; 絵所 1994; 絵所 1997, pp. 148-161, を参照されたい。
- (17) 農業における権力構造と農業生産性との関係を考察したペーパーでは、この問題を考察するにあたっては「マルクス主義的政治経済学」が有効であると論じている (Chakravarty 1984c)。
- (18) インドの輸出展望をめぐる 1980 年代中葉のインド国内の論争については、絵所 (1987) 第 4 章を参照されたい。

- (19) わが国で「後期ヒックス」に着目し、その意義を世に問うたのは井上義朗である(井上 1991)。井上は、「前期ヒックス」の立場はサムエルソンに比較的近かったが、「後期ヒックス」はカレツキやガルブレイスの市場認識に近づいたと指摘した。そして、こうした市場認識の転換は「市場把握における歴史の復活」をめざしたものであると論じている(井上 1993, pp. iv-v)。またアジア経済論の分野で原(1996)は、ヒックスが『経済史の理論』で提示した発想を生かそうと試みている。
- (20) ヒックスは「経済学者の形成」という小論の中で、1946年に始めてアメリカを訪問した時の印象を次のように述べているという。すなわち、「ポール・サムエルソン、ケネス・アロー、ミルトン・フリードマン、ドン・パティンキンのようなすぐに有名になった経済学者たち」は、「私(ヒックス)よりもはるかに数学の技法に通じており、私が大雑把にしておいた分析を鋭くしてきた。しかし私は彼らに失望したし、失望しつつきてきたといわざるをえない。彼らのあげた成果は偉大である。しかし彼らは私の同族(my line)ではない。私は理論のための理論には共感を覚えない」。このエピソードは、自らを「断固としてヒックス派」と称するカウシク・バサーによって語られたものである(Basu 1994b)。言うまでもなく、バサーは「断固としてチャクラヴァルティ派」でもある。
- (21) ヴェブレンが各社会に見られる「思考のくせ(habits of thought)」と表現したことに、チャクラヴァルティは大きな興味をいだいていた(Chakravarty 1987c)。
- (22) チャクラヴァルティが得意としたのは、「開発計画という観点から見た経済学史(あるいは経済思想史)」である。こうした資質はヒックスのというよりも、シュンペーター的である。1989年にチャクラヴァルティがケンブリッジ大学で行なった未公開のマーシャル・レクチャー(Chakravarty 1989c)の注の一つからうかがわれるように、彼の経済思想史(あるいは歴史・制度・文化)への興味をかきたてる上で大きな影響を与えたのは、インド経済思想史を対象としたガンゲーリ(Ganguli 1977)とババトシュ・ダッタ(Datta 1962)の両研究である。ガンゲーリは、DSEの国際貿易論教授であり、V. K. R. V. ラオのあとをついでDSEの理事長およびデリー大学副総長を歴任した人物で、DSE時代のチャクラヴァルティの先輩にして同僚にあたる(Dhar 1995; Raj 1995; Byres 1998, pp. 54-55)。一方、ババトシュ・ダッタはプレジデンスー・カレッジ学生時代のチャクラヴァルティの先生である。ガンゲーリの著作は、インドの教育において深刻な空白となっていた「インド経済思想の歴史と発展」を埋めるべく、インド経済学会が

1973年の決議にもとづいてガンゲーリに執筆を依頼したものであった (p. vii)。19世紀インドの経済思想をとりあつかった著作はいくつかあるが、ガンゲーリのそれは出色である。もっと読まれていい著作の一つであろう。なおチャクラヴァルティが強調した「歴史と理論の狭間」という考え方は、彼の影響を大きく受けた現在のインドを代表する二人のエコノミストによって受け継がれている。カウシク・バスーとアミット・バードゥリである (Basu 1984; Basu 1991b; Basu 1994c; Bhaduri 1993; Bhaduri 1999)。

- (23) アショク・ミトラは1928年生まれ。ベンガルを代表するエコノミストの一人である。チャクラヴァルティに先だってティンバーゲンの下で指導を受け (1951~54年)、博士号を取得した (Byres 1998, pp. 98-102)。
- (24) インド知識人のチャクラヴァルティに対する根強い尊敬の念の根源は、彼の経歴にある。1950年代後半から60年代にかけてDSEは「黄金時代」を迎えていた。K. N. ラージに加えて、ババトシュ・ダッタが「若手三羽鳥」とみなしたアマルティア・セン、ジャグディシュ・バグワチ、スカモイ・チャクラヴァルティが続々とDSEのスタッフとして集まったからである。しかし1960年代後半から70年代にかけて、DSEスタッフの「海外への亡命」(Basu 1995)が始まった。セン、バグワチ、パドマ・デサイ (Padma Desai: バグワチとは夫婦)、プラナブ・バルダン (Pranab Bardhan)、プラサンタ・パタナイク (Prasanta Pattanaik) が次々に海外の大学へと転職した。この流れの中において、チャクラヴァルティだけはインド国内にとどまりインド国民経済の運営に一生を捧げた。この事実が (Brahmananda 1990)、彼に対する尊敬と信頼のベースを形づくっている。
- (25) 「生涯を通じて、スカモイは政治的左翼であることと知識と推論の力に対する偉大なる信仰との組み合わせを維持しつづけた」とセンは評している (Sen 1998)。またサムエルソンは、チャクラヴァルティを「インド愛国者」として理解していた (Samuelson 1998)。

参考文献

- Agarwala, A. N. & S. P. Singh eds. 1958. *The Economics of Underdevelopment*, London: Oxford University Press.
- Agarwal, Manmohan 1991. "Sukhamoy Chakravarty as a Development Economist," *Economic and Political Weekly*, Vol. 26 No. 35, August 31.
- Amsden, Alice 1989. *Asian's Next Giant: South Korea and Late Industrialization*, New York: Cambridge University Press.
- Arndt, H. W. 1987. *Economic Development: The History of an Idea*, Chicago &

- London: Chicago University Press.
- Bagchi, Amiya Kumar 1988. "Bhabatosh Datta," in Amiya Kumar Bagchi ed., *Economy, Society and Policy: Essays in the Political Economy of Indian Planning: In Honour of Professor Bhabatosh Datta*, Calcutta: Oxford University Press.
- Banerjee, Dipak 1991. "Introduction," in D. Banerjee ed., *Essays in Economic Analysis and Policy: A Tribute to Bhabatosh Datta*, Delhi: Oxford University Press.
- Basu, Kaushik 1984. *The Less Developed Economy: A Critique of Contemporary Theory*, Delhi: Oxford University Press.
- Basu, Kaushik 1991a. "Sukhamoy Chakravarty: A Life in Our Times," *Sunday*, 18-24 August, reprinted in Basu 1994c.
- 1991b. *Economic Graffiti: Essays for Everyone*, Bombay: Oxford University Press.
- 1994a. "The Delhi School of Economics from a Personal Point of View," in Basu (1994c) and Kumar & Mookerjee eds. (1995).
- 1994b. "Remembering Sir John Hicks," in Basu 1994c.
- 1994c. *Of People, Of Places: Sketches from an Economist's Notebook*, Delhi: Oxford University Press.
- , Mukul Majumdar, & Tapan Mitra 1993. *Capital, Investment and Development: Essays in Memory of Sukhamoy Chakravarty*, Delhi: Oxford University Press.
- Bhaduri, Amit 1993. *Unconventional Economic Essays*, Delhi: Oxford University Press.
- 1999. *On the Border of Economic Theory and History*, Oxford & New York: Oxford University Press.
- , C. H. Hanumantha Rao & S. N. Raghavan 1993. "Introduction," in Chakravarty 1993.
- Bhagwati, Jagdish 1984. "Development Economics: What Have We Learned?" *Asian Development Review*, Vol. 2 No. 1.
- & Sukhamoy Chakravarty 1969. "Contributions to Indian Economic Analysis: A Survey," *American Economic Review*, September, Vol. 59 No. 4, Part 2, Supplement.
- & T. N. Srinivasan 1984. "Indian Development Strategy: Some Comments," *Economic and Political Weekly*, Vol. 19 No. 24, November 24.

- & ——— 1993. *India's Economic Reforms*, New Delhi: Ministry of Finance, Government of India.
- Boeke, J. H. 1953. *Economics and Economic Policy in Dual Societies*, Haarlem: Tjeenk Willink & Zoon (永易浩一訳『二重経済論』秋葉書房, 1970).
- Brahmananda, P. R. 1990. "Sukhamoy Chakravarty: A Homage," *The Economic Times*, 5 September.
- Byres, Terence J. 1997. "Sukhamoy Chakravarty on Marxist Economics and Contemporary Developing Economies: Some Comment," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 11.
- 1998a. "From Ivory Tower to the Belly of the Beast: The Academy, the State, and Economic Debate in Post-Independence India," in Byres ed. 1998.
- 1998b. "The Creation of 'The Tribe of Pundits, Called Economists': Institutions, Institution-Builders and Economic Debate," in Byres ed. 1998.
- ed. 1998. *The Indian Economy: Major Debates Since Independence*, Delhi: Oxford University Press.
- Chakravarty, Sukhamoy 1959. *The Logic of Investment Planning*, Amsterdam: North-Holland.
- 1962a. "The Existence of an Optimum Savings Program," *Econometrica*, Vol. 30.
- 1962b. "Optimal Savings with a Finite Planning Horizon," *International Economic Review*, Vol. 3. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1969. *Capital and Development Planning*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 1973. "Theory of Development Planning: An Appraisal," in H. C. Bos, H. Linnerman & P. de Wolff eds., *Economic Structure and Development*, Amsterdam: North-Holland. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1974. "Reflections on the Growth Process in the Indian Economy," Foundation Day Lecture delivered at the Administrative Staff College of India, Hyderabad. Reprinted in C. Wadhwa ed., *Some Problems of Economic Policy*, Revised Second Edition, Bombay: Tata-McGraw Hill, 1977, & Chakravarty 1993, Chakravarty 1997.
- 1975. "Mahalanobis and Contemporary Issues in Development Planning," *Sankhya*, Vol. 37 (Series C, Part 2). Reprinted in Chakravarty 1993.

- 1977. "Planning Techniques in India," in D. T. Lakdawala ed., *A Survey of Research in Economics, Vol. 1, Method and Techniques*, New Delhi: Indian Council of Social Science Research.
- 1979a. "Keynes, 'Classics' and the Developing Economies," in C. H. Hanumantha Rao & P. C. Joshi eds., *Reflections on Economic Development and Social Change*, Delhi: Allied. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1979b. "On the Question of Home Market and Prospects for Indian Growth," *Economic and Political Weekly*, Special Number, August. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1979c. "Development Theory and the New International Economic Order," in Irma Adelman ed., *Economic Growth and Resources: National and International Measures*, London: Macmillan. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1980. "The Relevance of Growth Models in Development Planning," *The Pakistan Development Review*, Vol. 19 No. 2, Summer. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1982. *Alternative Approaches to a Theory of Economic Growth: Marx, Marshall and Schumpeter*, R. C. Dutt Memorial Lectures on Political Economy, 1980, Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta & New Delhi: Orient Longman. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1983a. "Paul Rosenstein-Rodan — An Appreciation," *World Development*, Vol. 11 No. 1. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1983b. "Joan Robinson: An Appreciation," *Economic and Political Weekly*, Vol. 18 No. 4, October 1. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1984a. "Aspects of India's Development Strategy for the 1980s," in *Economic and Political Weekly*, May 19–26 & Chakravarty 1993.
- 1984b. *Trade and Development: Some Basic Issues*, New Delhi: Research and Information System for the Non-Aligned and Other Developing Countries. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1984c. "Power Structure and Agricultural Productivity," in Meghnad Desai, Susanne Hoerber Rudolph & Ashok Rudra eds., *Agrarian Power and Agricultural Productivity in South Asia*, California: Berkley. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1985. "Policy-making in Mixed Economy — The Indian Case," in

- Chakravarty 1993.
- 1986a. "Report of the Committee to Review the Working of the Monetary System — A Re-examination," in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1986b. "Development Dialogues in the 1980s and Beyond," *Indian Economic Review*, Vol. 34 No. 3, *Economic and Political Weekly*, Vol. 21 No. 52, December 27 & Research and Information System for the Non-aligned and other Developing Countries. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1987a. *Development Planning: The Indian Experience*, Oxford: Clarendon Press (黒沢一晃・脇村孝平訳『開発計画とインド』世界思想社, 1989).
- 1987b. "The State of Development Economics," *The Manchester School*, Vol. 60 No. 2. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1987c. "Marxist Economics and Contemporary Developing Economies," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 11. Reprinted in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- 1987d. "Development Strategies in the Asian Countries," in Chakravarty 1993.
- 1987e. *The Teaching of Economics in India*, Bombay: Himalaya Publishing House.
- 1987f. "Gunnar Myrdal," *The Hindustan Times*, Delhi, May 20. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1988a. "P. C. Mahalanobis — A Personal Tribute," in Chakravarty 1993.
- 1988b. "The Logic of Employment-Oriented Planning in Developing Countries," (G. L. Mehta Lecture), The Institute of Financial Management and Research, Madras. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1988c. "The Development of Development Thinking," R. R. Kale Memorial Lecture, Gokhale Institute of Politics and Economics, Pune. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1988d. "Development Experience in South Asia," *Asian Development Review*, Vol. 6 No. 1.
- 1988e. "Post-Keynesian Theorists and the Theory of Economic Development," in A. Nentje ed., *Keynesianisme Vandaag*, Alphen a/d Rijn. Reprinted in Chakravarty 1993.

- 1989a. "Sir John Hicks: An Appreciation," *The Economic Times*, June 26. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1989b. "Nicholas Kaldor on Indian Economic Problems," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 13. Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1989c. "Development Economics in Perspective," in Chakravarty 1997.
- 1990. "Development Strategies for Growth with Equity: The South Asian Experience," *Asian Development Review*, Vol. 8 No. 1.
- 1991. "Development Planning: A Reappraisal," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 15.
- 1992. "Prologue: Economics as Seen by a Dissent Economist," in Philip Arestis & Malcolm Sawyer eds., *A Biographical Dictionary of Dissenting Economists*, London: Edward Elger Publishers, Reprinted in Chakravarty 1993.
- 1993. *Selected Economic Writings*, Delhi: Oxford University Press.
- 1997. *Writings on Development*, Delhi: Oxford University Press.
- Unpublished. "M. Kalecki and Development Economics," in Chakravarty 1993 & Chakravarty 1997.
- Datta, Bhabatosh 1962. *The Evolution of Economic Thinking in India: Dr. P. N. Banerjea Memorial Lectures 1961*, Calcutta: Federation Hall Society.
- 1992. *India Planning at the Crossroad*, Delhi: Oxford University Press.
- Deasai, Meghnad 1987. "Comments on Sukhamoy Chakravarty: Marxist Economics and Contemporary Developing Economies," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 11.
- Dhar, P. N. 1995. "The Early Years," in Kumar & Mookherjee eds. 1995.
- Economic Advisory Council: Government of India 1989, "Report on Current Economic Situation," *Financial Express*, December 29.
- 絵所秀紀 1987. 『現代インド経済研究』法政大学出版局.
- 1991. 『開発経済学—形成と展開—』法政大学出版局.
- 1994. 「インド・モデルから韓国モデルへ」萩原宜之編『講座現代アジア3 民主化と経済発展』東京大学出版会.
- 1997. 『開発の政治経済学』日本評論社.
- 1999. 「独立後インドの経済思想(2)ヴェーケル=ブラマナンダの『賃金財』アプローチ」『経済志林』第67巻第2号.

- 2000a. 「独立後インドの金融統計」法政大学比較経済研究所ワーキング・ペーパー No. 84.
- 2000b. 「アマルティア・センのインド経済論」『経済志林』第 68 巻第 2 号.
- 2001a. 「独立後インドの経済思想(4)マハラノビス・モデル」『経済志林』第 68 巻第 3/4 号.
- 2001b. 「ジャグディシュ・バグワチとインド経済自由化の政治経済学」『アジア研究』第 47 巻第 1 号.
- Ganguli, B. N. 1977. *Indian Economic Thought: Nineteenth Century Perspectives*, New Delhi: Tata McGraw-Hill.
- Hanumantha Rao, C. H. & P. C. Joshi eds. 1979. *Reflections on Economic Development and Social Change*, New Delhi: Allied Publishers.
- 原洋之介 1996. 『開発経済論』岩波書店.
- Harcourt, G. C. & Ajit Singh 1991. "Sukhamoy Chakravarty, 26 July 1934-22 August 1990," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 15.
- Hirschman, A. O. 1981. "The Rise and Decline of Development Economics," in A. O. Hirschman, *Essays in Trespassing: Economics and Politics and Beyond*, New York: Cambridge University Press.
- 井上義朗 1991. 『「後期ヒックス」研究』日本評論社.
- 1993. 『市場経済学の源流』中公新書.
- 石川 滋 1990. 「開発計画化とインドの経験—チャクラヴァルティ教授の新著へのレビュー・アーツィクルー」(石川滋『開発経済学の基本問題』岩波書店, 1990).
- Komiya, Ryutaro 1959. "A Note on Professor Mahalanobis's Model of Indian Economic Planning," *Review of Economics and Statistics*, Vol. 41 No. 1, February.
- Kumar, Dharma & Dilip Mookherjee eds. 1995. *D. School: Reflections on the Delhi School of Economics*, Delhi: Oxford University Press.
- Lal, Deepak 1983. *The Poverty of Development Economics*, London: Institute of Economics Affairs.
- Lewis, Arthur 1954. "Economic Development with Unlimited Supply of Labour," *Manchester School*, Vol. 22. Reprinted in Agarwala & Singh eds. 1958.
- 1979. "The Dual Economy Revisited," *The Manchester School*, Vol. 47 No. 3.

- 1984. "The State of Development Theory," *American Economic Review*, Vol. 74 No. 1.
- Little, I. M. D. 1982. *Economics Development: Theory, Policy and International Relations*, New York: Basic Books.
- Mahalanobis, P. C. 1952. "National Income, Investment, and Development," in P. C. Mahalanobis, *Talks on Planning*, Calcutta: Indian Statistical Institute, 1962.
- 1953. "Some Observation on the Process of Growth of National Income," *Sankya*, Vol. 12 Part 4.
- 1955. "The Approach of Operational Research to Planning in India," *Sankya*, Vol. 16.
- Mitra, Ashok 1993. "Don't Let It Forget," *Economic and Political Weekly*, Vol. 28 No. 41, October 9.
- Mundle, Sudipt 1990. "Sukhamoy Chakravarty: Tribute to a Teacher," *The Economic Times*, 10 September.
- Nurkse, Ragnar 1953. *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries*, Oxford: Basil Blackwell (土屋六郎訳『後進諸国の資本形成』巖松堂, 1955).
- Raj, K. N. 1995. "The Delhi School of Economics," in Kumar & Mookherjee 1995.
- Rakshit, Mihir 1997. "Development Economics: A Synoptic View," in Chakravarty 1997.
- Reserve Bank of India 1985. *Report of the Committee to Review the Working of the Monetary System*, Bombay.
- Rao, V. K. R. V. 1952. "Investment, Income and the Multiplier in an Underdeveloped Economy," *The Indian Economic Review*, February. Reprinted in Agarwala & Singh eds. 1958.
- Robinson, Joan 1936. "Disguised Unemployment," *Economic Journal*, June.
- Samuelson, Paul A. 1969. "Foreword," in Chakravarty 1969.
- 1993. "Homage to Chakravarty: Thoughts on his Lumping Schumpeter with Marx to Define a Paradigm Alternative to Mainstream Growth Theories," in Basu, Majumdar & Mitra eds. 1993.
- Sen, Amartya 1960. *Choice of Techniques: An Aspect of the Theory of Planned Economic Development*, Oxford: Basil Blackwell.
- 1983. "Development Economics—Which Way Now?" *Economic*

- Journal*, Vol. 93 No. 372.
- 1993. "Sukhamoy Chakravarty: An Appreciation," in Basu, Majumdar & Mitra eds. 1993.
- 1997. "Policy Making and Social Choice Pessimism," in Amitava Bose, Mihir Rakshit, & Anup Sinha eds., *Issues in Economic Theory and Public Policy: Essays in Honour of Tapas Majumdar*, Delhi: Oxford University Press, 1997.
- Sen, S. R. 1962. *The Strategy for Agricultural Development and other Essays on Economic Policy and Planning*, London: Asia Publishing House.
- Stern, Nicholas 1991. "The Determinants of Growth," *The Economic Journal*, Vol. 101.
- United Nations 1951. *Measures for the Economic Development of Underdeveloped Countries*, New York: UN Department of Economic Affairs.
- Vakil, C. N. & P. R. Brahmananda 1956. *Planning for an Expanding Economy: Accumulation, Employment and Technical Progress in Underdeveloped Countries*, Bombay: Vora & Co.
- Wade, Robert 1990. *Governing the Market: Economic Theory and the Role of Government in East Asian Industrialization*, Princeton: Princeton University Press.

Economic Thoughts in Independent India (5):
Social Understanding and Indian Economic Analysis
of “the Later Phase of Chakravarty”

Hideki Esho

《Abstract》

Along with figures such as the Nobel Laureate in Economics Dr. Amartya Sen and Prof. Jagdish Bhagwati of the Columbia University, the late Dr. Sukhamoy Chakravarty (1932–1987) was one of the major representative Indian economists of recent times. He was the central moving force in shaping the economic policies of India during the 1970s and 1980s, in his capacities as member of the Planning Commission and Chairman of the Prime Minister’s Economic Advisory Council from 1971 to the time of his death in 1987. This paper traces his thought and analyses of Indian economic problems, considering how and why he so deeply influenced Indian economic management and economic ideas. The contents of the paper is outlined as follows: (1) Chakravarty’s evaluation of Mahalanobis’ growth model, (2) development ideas of Chakravarty, (3) his analysis of the Indian economy, (4) his comparison of South Asia and East Asia, (5) his devotion to the later phase of the thought of John R. Hicks.